

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-27

法政大学文学部創立八〇周年記念シンポジウム「二一世紀の知とところと人間」

吉村, 浩一 / 金山, 喜昭 / ブロウカリング, ジョン M. / 牧野, 英二[司会] / 勝又, 浩

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学文学部紀要 / Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University

(巻 / Volume)

48

(開始ページ / Start Page)

45

(終了ページ / End Page)

79

(発行年 / Year)

2003-03-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003990>

法政大学文学部創立八〇周年記念
シンポジウム

「二一世紀の

知とことろと人間」

報告者

勝 又 浩 (法政大学文学部 日本文学科教授)

ジョン・M・プロウカリンゲ

(法政大学文学部 英文学科助教授)

金 山 喜 昭 (法政大学文学部 教育学科助教授)

吉 村 浩 一 (明星大学人文学部 教授)

司 会

牧 野 英 二 (法政大学文学部 哲学科教授)



提題者の紹介と本シンポジウムの趣旨について

牧野 ただ今より文学部創立八〇周年の記念行事として企



英二 牧野
(司会)

画されましたシンポジウムを開催いたします。

最初に、本日のシンポジウムの提題者の方々をご紹介します。いただきます。

まず日本文学科教授

で近現代文学・昭和文学・批評などをご専門とされる勝又浩先生、次に英文学科助教授で演劇学・英米文学を専攻されるジョン・M・プロウカリング先生、教育学科助教授で博物館学・歴史学ご専攻の金山喜昭先生、そして明星大学人文学部教授で認知心理学・知覚論をご専攻の吉村浩一先生です。なお、申し遅れましたが、シンポジウムの司会進行役は、哲学科教授の牧野英二が務めさせて戴きます。どうか宜しくお願いたします。

先生方のご発表に先だって、本日のシンポジウムの進行に

ついて説明させていただきます。まず司会者からシンポジウムの趣旨について簡単にコメントさせていただきます、それを受けて四名の先生にプログラム掲載順にご発表いただきます。次に短い休憩を挟んで、司会者も加わり五名で質疑応答を行ない、最後に司会者より議論全体に対する総括ないしまとめでシンポジウムを締め括らせていただく予定です。

それでは本日のシンポジウムの狙い・趣旨について、「二一世紀の知とところと人間」というタイトルに即して、司会者からの問題提起をかねて説明させていただきます。

フランスの哲学者で今も活発な活動を行っているジャック・デリダは、二〇年ほど前に来日した折、「今日、大学についてどうして語らないか／言い換えれば、どのように語ってはならないか」（『大学の瞳』被後見人―「根拠律」と大学の理念）というきわめて両義的なテーマの大学論を講演しました。それから約二〇年後の二〇〇四年度には、国立大学の独立法人化が実現いたします。明治以降最大級の教育研究機関の変更是、学問のあり方・教育研究のあり方にも大きな影響を与えることは、容易に推測されることでありましょう。

しかし、こうした制度上の大変革に先立ちすでに数十年以

前から、「人文科学の危機」と呼ばれる事態が指摘されてきました。フランスの社会学者ジュール・ブルデューは、やはり二〇年近く前に書いた書物（『ホモ・アカデミックス』一九八四年、第二部）の中で、「文学部は地上の権力という点では被支配的な学部であり、一方法学部と医学部は、社会的には支配的な学部である」という冷徹な指摘を行なっていました。この指摘やこの見解の前提になる大学像・学部間の構図そのものは目新しいものではありませんが、彼の指摘が、今日の文学部や人文科学と呼ばれる諸学問が直面する困難な状況がグローバルな規模で普遍的に進行している点突いている事実は、見逃すことはできません。

ところで昨年は、誰も予想できなかったようないわゆる「大規模なテロ」がニューヨークで勃発したことは皆様の記憶にも新しいことでもあります。この出来事は、人間のもっと最新の技術や知識を動員してもっとも衝撃的な「無差別テロ」が実行されただけでなく、この出来事が直接・間接的な意味での被害者に対してだけでなく、あの映像を目のあたりにした世界中の人々に、改めて人間の行ないやそこへと駆り立てる心や精神のあり方、そしてそれを実現するための科学技術

による「輝かしい悲惨」を生み出す力の恐ろしさと不可解なありさまをみせつけたと感じたのは、司会者だけではないと思います。

以上をまとめますと、こうした激動する時代に生活する人間のあり方を考察対象とする人文科学の学問的課題のひとつとして「知と人間」というテーマが挙げられると思います。しかし「知」も「人間」も「人間」もすべてが多様な多義的な意味と解釈がみられる言葉であります。こうした事情を念頭におくと、このテーマは、知識や学問がどのように変化し、それによって「こころ」の捉え方がどのように変わり、人間理解のあり方もまた、どのように変化してきたのか、という問いとして表現することができます。一方では人文科学の危機が叫ばれながら、他方で学問は着実に進展・発展しているように思われます。するとこの問いの立て方は、さらに次のように分節化することができます。

第一に、知のあり方は、近現代にどのように変化（進歩・発展）してきたのか？ 第二に、知のあり方が「こころ」をどのようなものとして把握し理解してきたのか？ 第三に、こうした変化によって「人間」理解がどのように変化してきた

たのか？ 第四に、こうした変化をどのように評価するか？ 第五に、今後の課題と可能性をどのように考えているか？

先生方には、以上のような司会者からの問題提起を踏まえた上で、次のような点にもご留意いただいで、個別テーマの発表をお願いします。

第一に、二一世紀を迎えて個別科学、とりわけ自然科学の大きな進歩と発展のなかで、人文科学、文学部および大学院人文科学研究科を構成する諸学問の分野を中心に、新たな時代の人文科学の可能性を論じあっていただきます。

第二に、本学文学部に来年度新設される心理学科との関係も念頭において、同時に本学文学部の過去の実績や伝統も考慮しながら、二一世紀における知のあり方や人間とその「ころ」のあり方・捉え方の変化や発展などを中心に議論していただきます。

第三に、上記の論点をそれぞれ専門分野の異なる立場から論じていただくとともに、シンポジウムのタイトルとして掲げられた共通テーマに対して、限られた時間のなかで提題者の観点から問題提起とともに討論材料を提出していただきます。

では勝又先生からお話いただきます。

「名人」から「達人」へ

勝又 浩 (法政大学文学部 日本文学教授)



勝又 浩 (日本文学)

日本の近代の知識人たちはみな、西欧文明への憧れのなかで育ち、そのなかで知的な、また人間的な目

覚めの体験も持ちます
が、なぜかそこには納まりきれず、成熟ともにも祖国の伝統に回帰してゆくというパターンを踏むようです。

たとえば、ドイツ留学体験から生まれた小説「舞姫」で日本の近代文学の目覚めを先導した森鷗外は、その晩年、一口に史伝ものと言われる「渋江抽斎」「井沢蘭軒」「北条霞亭」など、江戸の学者たちの世界に入り込んで、そこで優れた、円熟した作品群を残した、というような例をあげることができまます。あるいは、英文学研究を志して英国まで行き、その成果の上に立って小説を書き始めた夏目漱石でしたが、彼も

その晩年、毎日書き続けている小説「明暗」に自ら食傷して、午後には漢詩作りでその「俗了」された精神を癒すのだと言ったことなども思いだします。晩年に急激に増える漱石の漢詩の中心には禅の思想が深く噛んでいました。

こんなふうには、あの時代に留学までした超エリートなのに、彼らは揃って、結局日本の伝統文化のなかに帰っているわけです。そこには、彼らの、いわば明治近代の第一世代としての困難もあったでしょうが、突き放して、日本知識人のパターンとしてみれば、それは何も彼ら明治の偉人たちだけに限られたことではないようです。たとえば、昭和という時代を代表する知識人の一人、つまり鴎外、漱石には孫の世代くらいに当たる小林秀雄。彼はその十代の終わり、アルチュール・ランボウの詩に衝撃と言うに等しい出会いがあつて文学に入つていった人でしたが、その批評家としての円熟は日本の古典を論じた「無常といふ事」などから始まりました。そして生涯最後の大作として「本居宣長」に行き着いたことは知る人も多いのではないのでしょうか。

日本の近代の知識人はみな、基本的にこういうパターンの中にあるのだということがお分かりいただけたかと思えます

が、何故こんなことになっているのかと問うと、そこにはおそらく日本近代の教育の問題があります。

ふらんすへ行きたしと思へども

ふらんすはあまりに遠し

せめては新しき背広を着て

きままなる旅にいでてみん（旅上）

と詩つたのは萩原朔太郎です。彼は何故フランスなどに憧れたのでしょうか。そのあたりを、永井荷風はこんなふうに言います。

フランス！ あ、フランス！ 自分は中学校で初めて

世界歴史を学んだ時から子供心に何と云ふ理由もなく仏

蘭西が好きになった

……自分は何故一生涯巴里に居られないのであらう。

何故仏蘭西に生まれなかつたのであらうと、自分の運命を憤るよりは果敢く思ふのであつた。自分には巴里で死んだハイネやツルゲネフやショーパンなどの身の上が不

幸であつたとはどうしても思えない（「巴里のわかれ」）

というものがありません。

こんなふうと言つた永井荷風、しかしその荷風の代表作は、俳諧師を主人公にした「すみだ川」であり、玉の井の娼婦を描いた「暹東綺譚」であるのは皆さんご承知の通りです。また「ふらんすへ行きたし」と言つた萩原朔太郎には、文字通り「日本への回帰」という優れたエッセイ集があります。

明治政府はその義務教育体系を西洋ものの翻訳に頼り、民族的なもの、伝統的なものをすっかり排除してしまいました。そしてこんな植民地政策のような教育改革は世界規模で見ても異例異常なことだと言われますが、そうした教育の成果がこれらの知識人を作っていると云つてよいのではないのでしょうか。欧化教育は高等教育へ進めばますます強くなります。そうして育てられた、生活から浮き上がった、西洋への極端な憧れ、それが結局、急転直下して彼らに伝統回帰を促すのではないか。

例はいくらでも上げられますが、そうしたなかの「典型」として、早世した中島敦について今は考えてみたいと思います。彼にはたとえば「遍歴」と題した戯れ歌、「和歌でない歌」

ある時はヘーゲルが如万有を我が体系に統べんとせし
ある時はアミエルが如つ、ましく息をひそめて生さんと思ひし

ある時は若きジイドと諸共に生命に充ちて野をさまよひぬ
ある時はヘルデルリンと翼並べギリシヤの空を天翔りけり
ある時はフライリップのごと小さき町に小さき人々を愛せむと思ふ

ある時はラムポーと共にアラビヤの熱き砂漠に果てなむ心
ある時はゴッホならねど人の耳を喰ひてちぎりて狂はんとせし

冒頭から抜き出しましたが、「遍歴」とは、こんな「ある時は」がトランプのように五十四首並んでいる戯れ歌です。そうして、この中で東洋人は老子、李白、人麿、西行など十人のみ、他は全て西洋の偉人たちです。中学生の時から作家になりたいと考えていたような中島敦ですから、これらの人名にはそうした傾き——ここには、たとえばリンカーンも

51 法政大学文学部創立80周年記念シンポジウム

ワシントンもないわけですから——もありましょうが、それでも、この西洋偉人尺くしは驚嘆に値します。

しかし、見方を換えると、中島敦はここで、旧制高校生の、あの「デカンショ節」をやっているわけです。「デカンショ」ということばのいわれについてはいくつかの説があります。が、最も知られているのはデカルト、カント、ショーペンハウエルを約めたのだと言われています。ですから、この「戯れ歌」をさして唐木順三は、「無類も無類な日本学生の姿」だと言いましたが、京城中学始まって以来の秀才だと言われたような中島敦でしたから、まさに「日本学生」の典型ともなれた、なっていましたでしょう。日本の近代の教育のお陰で、彼はこういう知識人になったわけです。

ただし、付け加えておけば、この戯れ歌は、そういう知識人になってしまったことを自嘲しているわけです。そうして、ご存知の方も多いと思いますが、彼の作家としての代表作は中国古代に材をとった「弟子」であり、「李陵」でした。中島敦は三十三歳で早逝したひとですが、にもかかわらず、その人間的な完成はやはり伝統文化、父祖の血たる漢学の世界に戻っているのです。

ところで、その中島敦が最晩年に書いた面白い寓話に「名人伝」という一編があります。天下一の弓の名人を目指した紀昌という男が、師匠も乗り越え、弓を使わずに飛ぶ鳥を落としてみせた仙人さえも乗り越えて、とうとう弓を使わないどころか弓を忘れた、晩年には、弓を見てこれは何に使うものかと尋ねて村人を驚かしたという話です。弓を忘れてしまった弓の名人。この寓話からいろいろな意味が読みとれますが、私が最近思うことは、これは一人の人間が名人から達人にまで成長した話なのだと思います。作品では、弓など使わずに、構えただけで飛ぶ鳥を落としてみせた仙人に出会ってショックを受けた主人公紀昌は、早速入門を願いますが、それから九年間、「その間如何なる修行を積んだものやらそれは誰にも判らぬ」と書かれています。それで、中島敦研究の上ではいろいろ議論もあるのですが、私はそれを、技術の修得から人間そのものの修行に切り替わったのだと言ってきました。紀昌の九年間の修行とは、達磨の、あの「面壁九年」に引っかけたに違いないと思うからです。しかし今それを、もう少し一般化して、弓の名人紀昌は、そこで名人から達人へ進んだのだ、と言い換えてみたい。

日本語には、もとより漢語から来ているわけですが、名人と達人の使い分けがあります。念のため辞書を引いてみれば次のようになっています。

名人 ① 技芸に優れた人。その分野で、ひいでた人。②

将棋・囲碁で時の最高段位（九段）者に江戸幕府が与えた称号。現在はそれぞれのタイトルの名称。

名人氣質。名人芸。名人肌。

達人 ある方面に多くの経験を有し、すぐれた技能を持つている人。「達人は大観す」（「達人は一部にとらわれず全体を見通すので判断を誤らない」）

【大辞林】

つまり、「名人」は単にその道の技芸に優れていればよいのですが、「達人」は技芸の他に世の中や人間性についての広い見識を持つていなければならないわけです。「達人は大観す」とありますが、そこが要ではないでしょうか。たとえば刀を作る人はただ名人であればよいでしょうが、刀を使う人は、今鞘を払うべきかどうか、高度な見識と判断力を持つ

てもらわなくては困ります。その見識のためには、剣とは何かと、その本質を極めるということもあるでしょうし、結局、技術だけでは終わらない、人間性そのものの鍛錬が要求されるだろうと思います。

そうして、今まであげてきた日本近代の大きな知識人たちが、日本の教育で受けたものに満足できず、安心立命できなかったのも、そのことに関わると思います。学校教育で「知」は沢山仕込まれるけれど、それを生かす「人間」について、いかに生きるかについては何も教えてくれない。人は「知」にのみ生きるわけではない。「知」などなくても立派な人間はたくさんいるし、「知」が返って「人間」を壊しているのが現状だと、そういうことに気づいたとき、彼らは伝統に、「知」と「人間」とが不可分のものとして一体であった文化伝統を改めて発見することになったのではないのでしょうか。

現代はIT時代だ情報時代と言われ、コンピューター、インターネットといったものが第二の大航海時代をもたらした、文明開化、近代化を世界的規模で押し進めているようです。情報が解放されてどんな国どんな人にも瞬時にして膨大な細密な専門家なみの知識情報が得られるのは結構なことですが

が、私の見るところ、そこから生まれてくるのは奇妙な情報オタクばかりのようです。情報を集めること自体の快樂のなかに埋没してしまうのです。ミソもクソも一緒くたの多量な情報を取り込んで、それで何かが分かったような、何かを支配できたような気になって安心してしまっているのではないのでしょうか。「情報」を追えば追うほど「人間」が不在になる、現代はそういう関係を強いられるように思われます。

人類は原子力を発見し、原子爆弾を作ってしまった。それは文明であり、人類の財産の一つであることは否定できません。それを作り上げた科学者たちを、だからそれ故に責めるわけにはいかないでしょう。彼らに発明したものの使われ方まで責任をもてとは、やはり言うべきではない。科学者はつまり名人であるしかないし、それでよいのだと、私は思います。そしてそれ故に、その発明品を使う人間は、名人を越えた達人であることが要求される、そう認識してゆくべきだと思います。

「子曰く、学んで時に之を習ふ」というところから学問の始まった昔は、学問と修養とは一体のものでしたが、近代の学校教育のなかで教養などと言われるようになってからそれ

が崩れ、修養が、つまり教養を持って扱う主体の方の教育が疎かになってしまいました。時代の波に押されてのことに違いありませんが、いま教育の現場でもさかんにスキルだスキル（技術、手練）だと議論しています。つまり名人をどんどん養成しようと言うのでしょうか。しかし、もう繰り返すまでもないと思いますが、世の中がマニュアルとスキル人間にあふれているような現代こそ、せめて教育だけでも、人はスキルのみに生きるのではないことを指し示しておくべきだと、私は考えます。

いま教育の場で必要なことは、情報を提供することでも、情報の集め方を教えることでもない、情報をどう扱うか、正しく使うかという主体の形成ではないでしょうか。言い換えれば、有り余る情報に負けない、情報に振り回されない人間を作ることです。大局的な立場に立って、与えられた情報を時に無視したり、忘れてしまえるような人間、情報の達人、そういう人間を作ることではないでしょうか。それが、私の二一世紀の知と心と人間への期待です。

牧野 ありがとうございます。先生のご発表では、特に

前半は日本の近代人、とりわけ文人のいくつかの例を取り上げながら、近代人の知の性格付け、特に西洋かぶれない日本帰帰という問題、近代の日本の知識人が自分を形成するために、結局のところ日本に帰帰せざるを得なかったということをご指摘いただきました。

二つ目として、本日のご報告のメインテーマであった「名人」から「達人」へでは、「達人」について詳しいご説明をしていただきました。さらに技術と人間という大変重要なテーマについてもここで触れていただきました。

それでは続いてプロウカリング先生、宜しくお願いいたします。

境界の崩壊

日本と西洋の間のインターカルチュラルシアター

ジョン・M・プロウカリング (文学部英文学科 助教授)

小説家のキプリングが「東は東、西は西、両者は相まみえず」という言葉を残しました。この考えは、根底にある理念や実践が異なる東洋と西洋のドラマについても、今までは良



ジョン・M・プロウカリング
(英文学科)

く当てはまるものでした。しかし、今日では東西の境界が次第に崩れ、「あいまみえず」とは言い難い状況にあります。このようなドラマの分野における異

文化間の融合の状況を探るのがインターカルチュラル・シアターとよばれるものですが、今日は、どのようにその境界が崩れてきたのか、また、それがわたしたちのものの見方にとどのような影響を与えてきたのか等についてお話したいと思います。

まず、西洋のドラマとはどのようなものかですが、西洋のドラマの概念はアリストテレスが「詩学」の中で述べたドラマの原理に基づいています。アリストテレスは、悲劇について述べながらドラマの六つの基本要素を検証しています。この基本要素は悲劇に限らず、すべてのドラマに応用できるものと考えられています。

アリストテレスは、悲劇とは「行為の模倣」(ミメシス)

であると定義しています。ここでの行為とは役者の個々の行為だけでなく、その演劇全体の劇作家によってあらすじの中に仕掛けられた一連の出来事としての行為を意味し、それゆえ、よく「筋」とも訳されています。そして、六つの要素とは順に性格、思想、語法、歌曲、視覚的装飾と呼ばれますが、最初の三つは内面的なもので、あとの三つは物質的外的なものにとらえることができます¹⁾。これらの六要素は行為を実現するために密接に係わり合い、この順序で体系化されています。アリストテレスは、語法、歌曲、視覚的装飾の三要素は他の要素よりも重要性が低いと述べています。それは戯曲を読むだけで即ち語法、歌曲、視覚的装飾の三要素を体験しなくても行為の模倣と感動は伝わるからです。作品の思想は性格によって実現され、この二つは筋ないし行為に現れます。

そしてこれがのちにシェイクスピアにより実践され、一九世紀に花開くリアリズムの基礎となっています。リアリズムとは簡単にいえば、現実を舞台上で再現することです。ロシアの演出家、スタニスラフスキーは特に外的リアリズムに加え、心理的リアリズムも要求するなどしてその原理を突き詰

め、西洋の演技のスタイルに強い影響を与えました。それが、それ以後の西洋のドラマの特徴になっています。

では、つぎに東洋のドラマの特徴を見てみましょう。まず、最も大きな特徴として様式化された演技を挙げることが出来ます。それは肉体的視覚的なほんものらしさを再現しようとして、感情や行為を抽象的に表現しようとするものです。

例えば、能では非常に簡略化された動きで扇を最大限に使って、刀や杯、枕、雲など実に様々なことを表現します。たった数歩のステップで都から富士山までの旅を表現したりもします。歌舞伎では危険な刀での戦いをむしろ優雅なダンスとして表現したりします。

日本の演劇史の中ではドラマの理論で現在にまで受け継がれ、世界的に認められているものに世阿弥のものがありません。世阿弥は理論家であったと同時に能の脚本家であり役者でもありました。彼の理論は、アリストテレスがドラマの形態上の要素を検証したのと異なり、観客の存在を前提条件とし観客と役者の関係を提示しています。世阿弥は上演に際し、役者の「花」、観客の立場による「離見の見」、芝居の流れの「序破急」、などを強調しています。また、話の筋よりはむしろ

るムードや感情、宗教的な状態を想起させることを重視し、目的は「幽玄」であり、それは上演によつてのみ達成されるとしています。ここは、芝居は読むだけでも味わえるとしたアリストテレスと異なる点です。

つぎに役の裏に役者が存在するということを認め、それを隠さない点も異なります。例えば、歌舞伎で見られるような観客が役者の名を「成田屋」とか呼ぶ掛け声の習慣などはリアリズム以降の西洋ではまず考えられないことです。西洋では役者は舞台上では別の人格なのです。浄瑠璃や地謡にいたっては役者でないほかの者が台詞をしゃべったりしますし、能においてはワキとシテがお互いの台詞を言い合ったりすることもあります。

また、衣装を着替えたりするような過程を上演の一部として舞台上で行うことも西洋ではむしろ舞台上でなされることです。音楽の演奏者が舞台上にいるのも歌舞伎や能の特徴ですが、西洋ではオーケストラ・ピットなど観客が見えないところで演奏します。そして、このような様式はカタとして口から口へ、身体から身体へと受け継がれてきており、西洋の演劇が印刷されて伝わってきたのと異なります。さらに、西

洋では議論や思想の表現が中心で知性に訴えようとするのに比べ、東洋では直接再現しにくい人間の心の深い部分や心理などを感じさせるような表現をしようとするのも特徴的です。

さて今述べてきましたように、西洋のドラマと東洋のドラマは異なるものですが、現在ではそれらが混ざり合う状況が生まれています。沖繩ではアヴァン・ギャルド・シアターをはじめとして、役者も演出家もリアリズムに束縛されていることなきつき、非西洋的なドラマのあり方に興味を持つようになつてきたのです。たとえば東洋のドラマを見て演劇理論全体に影響を受けた劇作家として有名なのがドイツのブレヒトです。さらに、もつと最近では、東洋の肉体的なパフォーマンスの要素を西洋の古典と結合させるという動きが生まれています。西洋の古典演劇もハツキリとした証拠はないものの肉体的なパフォーマンスが行われていたことは推測でき、台詞が詩の形式で書かれていることから東洋の演劇の様式との共通点があつたと考えられます。リアリズムの発生以前に生まれた古典の世界がむしろ東洋の様式にぴったりとくるのは自然かもしれません。たとえば、インドのカタハリダス、バリのトベン、中国の京劇、日本の歌舞伎や能などの肉

体的な要素が用いられています。

ではいよいよ日本と西洋の間に絞ってそのインターカルチユラルシアターを見ていきましょう。日本には西洋の古典と日本の伝統的な演劇様式を組み合わせて成功した二人の演出家があります。皆さんもご存知だと思いますが、蜷川幸雄と鈴木忠志です。

蜷川の作品では桜吹雪など、さまざまな歌舞伎の手法を取り入れた日本風の「マクベス」がおそらく最も有名だと思います。ユウリピデスの「メーディア」では主役に女形を用い、三味線のコーラスも男たちにさせ、ギリシャやイタリヤなどの海外で絶賛されました。

鈴木は蜷川が歌舞伎の要素を多く取り入れているのと異なり、能のスタイルを取り入れています。彼は独自の訓練の手法を發展させ、それは「スズキ・メソッド」として海外で広く実践されています。精神病院を舞台にし王を車椅子に乗せて登場させたシェイクスピアの「リア王」、これに似た脚色で、広島が舞台となって展開するユウリピデスの「トロイアの女」が彼の最も有名な作品です。

この二人はどちらもその発想は日本の伝統的な演劇による

ところが大きいのですが、蜷川が歌舞伎、鈴木が能に重きを置いていた点が異なります。蜷川は歌舞伎の視覚的な舞台装飾を強調し、視覚的な美しさやスペクタクルの創造を狙っています。鈴木はそれと異なり、戯曲のエッセンスに廻り、言葉や粗筋を省略したり時には他の話を継ぎ合わせるなどして独特な世界を作り上げています。能のように簡略化された舞台が、大変厳しく制限された演技のスタイルとあいまって独特な非日常的な世界を作り上げるのに成功しています。

興味深いのは、両者とも西洋のドラマをもつと日本人々に受け入れられやすいものにしようと努力したことが始まりであったのが、海外でも人気を集めることとなったことです。日本の伝統演劇が、文化的な境界と時間的な境界を超越する力や可能性を秘めているということが証明されたと言えると思います。

西洋においても同じような試みをしている演出家はいます。最近来日し、その舞台が俳優によって演じられる人形のための古代東洋の物語として絶賛されたテアトル・デュ・ソレイユのアリアヌ・ムヌシユキンがその一つの例です。彼女は文楽の手法を用いています。

イギリスの演出家ピーター・ブルックは「ハムレット」において日本の能の繊細さをとりいれました。日本の伝統演劇を正確に忠実に取り入れるというのではなく、その伝統演劇の基本的な概念をもっと自由なかたちで活用している点が優れていると言えます。

では、時間もすいぶん超えておりますので結びに入りますが、今までお話ししてきたことからお分かりかと思いますが、はじめに紹介しましたキプリングの言葉は、現在のコミュニケーションの手段が発達した世界ではもはや当てはまらなくなつてきております。むしろ今日ではピーター・ブルックが言うように、「各文化は異なる心の地図を提供し、完全な人間の真理というものはグローバルなものである。そしてシアターこそがそのジグゾー・パズルのピースをつなぎ合わせる場所である」というのが正しい気がいたします。

映画やテレビやインターネットのような技術革新が進む中で、ドラマの位置付けが危ういものとなつたと感じる人もいるかもしれませんが、逆に、ドラマもみずから革新や適応を重ねているのです。ドラマの原理が文化人類学などに応用され、コンピューターのインターフェイスに応用されるのも、

ドラマが同じかたちで存在しつづけないとしても、人間の存在に不可欠であるということの証明であると思います。ドラマは人間の心を理解する重要な手段を提供し、また将来もずっと提供しつづけていくと思います。

(1) アリストテレス「詩学」、松本仁助と岡道男による和訳(岩波文庫、1997)。

(2) "Each culture expresses a different portion of the inner atlas: the complete human truth is global, and the theatre is the place in which the jigsaw can be pieced together." Peter Brook, *The Shifting Point: 1946-1987* (New York: Harper & Row, 1987) p. 129.

牧野 ありがとうございます。プロウカリング先生からは演劇論上のドラマという概念を手掛かりにして、この概念の歴史的、伝統的な見解の変遷をたどりながら、今日西洋と日本のドラマがどのようにして融合されるようになってきたかということについて、具体的な事例に即してお話いただきました。

それでは続きまして金山先生にお願いします。

「コレクションに見る「知」と「心」

二一世紀の博物館の展望

金山 喜昭 (法政大学文学部教育学科 助教授)

はじめまして、金山です。私の専門は博物館学と考古学で、

現在、大学では博物館

学を担当しております

す。法政大学には今年

の四月に着任しまし

た。それまでの十八年

間は博物館で学芸員と

して勤めておりまし

た。本日は、私の現場経験も含めてお話しをさせていただきます。

牧野先生からいただいたタイトルが「二一世紀の知と心」と人間」でしたので、その趣旨に沿って私の立場からいろいろと考えてみました。タイトルは、「コレクションに見る〈知〉と〈心〉」として、サブタイトルを「二一世紀の博物館の展望」とさせていただきます。従いまして、「コレ

クション」ということがキーワードになります。

そもそも「コレクション」とは一体どういうものを言うのでしょうか。これは、個人あるいは団体が、ある目的のために集めた「もの」の集合体を言います。コレクションには、集めた人の考えとか、価値観、その人の観察眼といったもののおおのずと反映されてきます。コレクションの起源はかなり古い時代にさかのぼりますが、例えば江戸時代においてもいろいろありますが、今日はシンポジウムのタイトルに「二一世紀」とありますので、二〇世紀のコレクションから説き起こしてまいります。

私なりに整理してみたところ、まず、コレクションの〈知〉と〈心〉の結合を二〇世紀の第一段階として挙げてみました。これはどういうことかと申しますと、〈知〉と〈心〉が、二〇世紀初頭、コレクションを通して結合した姿があったのではないだろうかということなのです。いろいろとコレクションの在り方を調べてみると、代表例の一つとして、柳宗悦のコレクションが挙げられます。柳宗悦は民芸コレクションの形成を図りながら、民芸運動を行ったことで有名です。柳のコレクションは、焼物・木工・金工・染色品、ある

いは絵画など、いわゆる日常用具の一大コレクションです。

ご存知のように、柳宗悦は昭和十一年に東京の駒場に日本民藝館を開館しました。当初、宗悦は李氏朝鮮王朝時代の民間の釜で焼かれた陶磁器に秘められた「美」を見出しました。そして、かれは朝鮮民族に対しての一種の敬愛感を抱いていたわけです。

彼は東大の哲学科で宗教哲学を学んだことから、彼の「知」の背景には宗教哲学があり、そういった視点で「美」というものを見出していく。その後、彼は国内では木喰上人の木彫仏から「美」を見出し、そこからさらに庶民の作ったいろいろな日常雑器類の有する「美」を求めていくというふうに、彼の美意識は変遷していくわけです。

宗悦は、最終的には庶民の生活品の中にある「美」を普遍化しようという活動をしていきます。これが彼の民芸運動と言われているもので、そこに益子焼で有名な陶芸家の濱田庄司や、京都の河井寛次郎といった人たちが彼の考えに共鳴して、民藝館を作ろうという一大運動をしていくわけです。そのため、展覧会を各地で開いたり、講演会、あるいは出版活動をしたり、また寄付を募ったりというようなことをしてい

くわけです。

中でも最大のパトロンが、大原孫三郎という方です。法政大学に大原社会問題研究所がありますが、実はその同じ大原孫三郎さんです。大原は、当時、柳に十萬円の寄付をしました。十萬円というのは大変な金額で、この寄付によって民藝館が作られたようなものでした。

その後、彼らの民芸運動は全国的に波及し、民藝館ができたとあとも各地で、例えば倉敷・松本や岐阜などに民芸館が作られていきました。今日でもそういう館が残っており、活動をしています。民芸運動の影響は現在までずっと引き継がれているわけです。柳の生き方を見てわかることは、いわゆる彼の「知」は、宗教哲学を基礎としたうえで、美学、美を見る眼であろうと思います。

それから「へこころ」ということで言うと、朝鮮人や、日本人などの庶民に対する敬愛心があったのではなかったか。そういうものが結合したかたちで、今日の日本民藝館にある民芸コレクションが形成されていったのです。これが私の一つの解釈です。

宗悦の「知」は、単に結合しただけではなくて、実はそこ

に柳の生き方というか生きざまが反映されている。それは先ほどからいろいろと出て来ましたが、私は一つの「教養」がそこに存在していたのではないかと思います。この教養の定義はいろいろあるようですし、先ほど養老先生からも恩師が説かれた教養について紹介されましたが、例えば、現在共立女子大学学長を勤めていらつしやる阿部謹也先生の教養の定義があります。教養とは、「自分が社会の中でどのような位置にあるのか、また社会のために何ができるかを知っている状態、あるいはそれを知らうと努力している状態」というように阿部先生は定義されています。だから、「教養」というのは多くの書物を読み、知識の豊かさを誇るということでは決していない。それは仮に教養だとしても、あくまでも個人的な教養である」という言い方をされています。そういう意味での教養が、私は柳宗悦のコレクションの在り方から浮かび上がってくると思います。

同じような例が、エドワード・S・モースです。モースは明治初年に来日したので、事例としては少し古くなります。あるいはN・G・マンロー、あるいは渋沢敏三といった人たちも同じような形でコレクションを作ったと私は思い

ます。この中の一例として、マンローのコレクションを参考例としてご紹介します。マンローは考古学史の中では有名な学者ですが、実は彼の本業は考古学ではなくて医師です。彼はスコットランド人で、スコットランドのエジンバラ大学医学部で学びました。エジンバラ大学には付属博物館があり、先史学や民族学のコレクションなどの学術資料を所蔵しており、学生たちに公開していました。マンローは付属博物館にも通いながら、医師としての勉強をする傍ら、考古学や民族学にも関心を持っていったのです。そういう附加的な学びころを彼は有していたわけです。

マンローは、医師として明治三年に来日し、横浜で医師として勤めるのですが、大学の博物館で考古学などを学んだ経歴があったことから、仕事のあい間をみつけて神奈川県内の遺跡調査、あるいは踏査をしました。また、日本の考古学の論文を書いて、海外に発信するというようなことをしていました。ですから、ただの医師ではなかったのです。

その後、彼は北海道に移住します。かれは北海道の景色が自分の故郷のスコットランドによく似ていることから、北海道が気に入ったようです。最初、大正八年に白老というところ

るに行きます。そこでアイヌの人たちに無料診療をするので、当時アイヌの人たちは、日本人が持ってきた伝染病、チフスや結核に侵されていきました。彼らは医療の手あてを得ることがなく、どんどん亡くなっていくという状態でした。そこでマンローは無料で診療したのです。マンローとアイヌの人たちとの間に信頼関係が生まれ、マンローは民族学についても造詣がありましたから、だんだんアイヌの文化についても理解を深めていくわけです。

その後、彼は二風谷に移り、自宅を建てました。やはり診療の傍らで今度はアイヌの民族資料、民具を集めていくのです。アイヌの紋様は、衣服や太刀などにいろいろ紋様が刻まれています。その紋様は一見すると、縄文土器の紋様とよく似ているのです。マンローは縄文研究を行っていましたから、ここで一つの仮説を立てました。つまり、アイヌの紋様が形成されるのは、実は縄文人の紋様を下敷にして自分たちの紋様を作ったのではないか、というものです。そこで盛んに紋様の付いたアイヌの民具を集めていく。そのためにアイヌの人たちは大いに協力しました。よってマンローのアイヌ民具コレクションは非常にすばらしいものになっていったので

す。

ここで「知」というのは何かというと、彼の持っている考古学・民族学、あるいはアイヌ紋様の起源についての仮説、これらが一つの彼の「知」です。それから「こころ」というのは何かというと、アイヌ文化に対する関心、あるいはアイヌ人に対するの思いです。これが結合したかたちで、「教養」としてマンローにはアイヌとともに生きて行く、医師として自分はアイヌとともに一生を送るという決意、生き方が出てきているわけです。

このようにして生きたマンローは、二風谷で一生を終えます。現在も二風谷に彼のお墓があるということです。当時は、そういう生き方がコレクションの「知」と「こころ」が結合したかたちでコレクションの中に存在したと言えるわけです。

次に二番目のところでは、コレクションの「知」と「こころ」の分離という現象が、その後出てきます。これは、戦後復興や昭和三〇年代になると高度経済成長で国土開発が急速に進み、それに伴って文化遺産がどんどん破壊されていき、そのためにそれを保護していかなければという動きが出てくる。

そこで忘れてはならないのは、宮本常一という民俗学者です。彼は、例えば佐渡の小木という町に行き、そこで町長の金子さんという方と知り合い、民具保存を訴えかけました。民具をいま保存しなければどんどん失われていってしまふ。小木は今でもいい町ですけれども、当時はもったいい町で、家を建替えていくと、それまでの生活用具を全部処分してしまふ。そこで彼は町長に話をして、とにかく要らなくなった民具を集めたほうがいいと金子町長に提案しました。町長もすばらしい人で、それに共鳴して、町の人たちがこぞって民具を集めるということをした。これが今日、小木の佐渡国民俗博物館という小学校校舎を再利用した博物館に収蔵されています。

また、三重県の鳥羽には海の博物館がありますが、それを開始したのは石原圓吉さんです。この方は国会議員でしたが、議員をやめた後、自分で博物館を作りました。それは伊勢志摩の海を何とか保全していきたい、汚染から守っていきたい、海洋生活文化を守っていきたい、ということとで博物館を作ったわけです。そこにもやはり宮本常一が現れて、「民具を守りなさい、いま守らなければもう永遠になくなってしまふ、

黙って五万点集めなさい」と進言をするわけです。

それに耳を傾けて実行する方は偉いのですが、保存を進言する学者の役割も看過できません。宮本常一は（知）、すなわち民俗学あるいは民具に対しての造詣があり、（こころ）、すなわち民俗学者として日本文化や日本人に対する思いがありました。民俗学で培った教養を有する彼としては、自分ができることは民具を残していくことだと考え、保存を実行する人たちに進言していく。自らも保存を実行していましたが、それは彼が成すべき一つの生き方であつただろうと思えます。

その後、やはり国土開発はどんどん進み、宮本常一の予言のとおり、どんどん民俗資料は失われていってしまふわけです。これに対し、国は各地の自治体に呼び掛けをして、補助金を出して歴史民俗資料館を設置していきます。

その理由は、国民の中にも文化遺産の破壊に対して反感が出てきたからです。その状況のもとで、行政としても対応していかなくてはならなくなってきたわけです。しかし、民具を収集する行政的な動きは一種のアリバイ工作のようなものです。行政が民具などの文化遺産を集めようとしても、（知）

やへこころが伴っているものではありません。へ知やへこころが希薄化する、あるいは分離化していくという現象になってしまいます。先ほどからお話ししております「教養」という、「いかに生きて行くか」というへ知の在り方も不透明なものになってきました。

当時は人文科学に代わって、急速に科学技術というものが台頭してくる時代でした。科学・技術・市場主義的な考え方がどんどん生まれてくる。これは人文科学の中にもいろいろな議論はあるかと思いますが、この当時までは研究者の中にも、「いかに生きるか」という信念をもつ人たちが存在しました。私もまだ当時は中学生でしたがその信念は理解しているつもりです。

例えば、考古学を研究する人たちは、国土開発によって次々に遺跡が壊されていくという状況の中で、それに対して疑問を持ち、あるいは抗議し反対活動するという生き方がありました。しかし、その後は沈黙化してしまって、考古学は発掘・整理をして研究するだけの学問になってしまい、いわゆるマニアックな学問になっていきます。これはたぶん、考古学だけではなく、他の分野でも共通すると思います。

要するに申し上げたいことは、「いかに生きるべきか」ということは、社会の枠組から離脱して、個人的な枠組みの中にはまり込んでしまつてしまったのではないか、ということだと思います。

また、科学・技術についても功罪相半ばするという言葉があるように、正と負の両面があると思いますが、それをあまり考えないで、ただ合理的なものだけを追求してきました。このことについては、おそらく皆さんご存じのとおりだと思います。

三番目になりますが、コレクションの不在ということがあります。これは文化遺産というのがほとんど喪失していく、あるいはコレクション・文化的遺産は社会から隠れたところに避難していってしまうという状況であります。高度経済成長で科学技術が振興し、経済力が高まるという状況の中では、税金がどんどん増え、行政としては公共事業に投資していくことになり、文化事業も公共事業の一環になりました。

当時の地方自治体では、首長選挙に立候補する場合、文化というものが票になった時代です。博物館を作るといって、それで当選する時代でした。博物館建設は、文化を振興して

いくという本当の目的からなされたものではありません。一つには、文化のアクセサリー化であります。例えば、市制三〇周年、県制百周年、あるいは人口が百万人を突破したから、その記念として博物館・美術館を作ろうというのが偽らざるところであると思います。

しかし、コレクションに関して言うと、実は本当の意味でのコレクションは存在していません。コレクションが不在の状態です。「箱物」、要するに博物館を作るのです。これがいわゆる「箱物行政」です。「箱物」を作ってからコレクションを作っていくようにする。そこで、資料収集をするけれども、実はそこで働く学芸員の観察眼というものが十分にこなれていないのですから、なかなかコレクションというものが形成されない。となると、「教養」も不在になってくるのです。

最後に、これまで述べてきた現在までの状況の中で、今後は、コレクションの〈知〉と〈ところ〉の結合の再生ということを図っていくことが必要だろう、と私は考えています。これが現在の閉塞化する社会の状況を開放する一つの方向にもなっていくと思います。そこで私は大学博物館に期待をし

たいと思います。公立の博物館は財政難といわれていますが、お金がないとなかなかできないという体質があり、大学のほうがその辺は柔軟に対応していけるだろうと思っています。

大学博物館の可能性は大にあると思います。大学にはそれぞれコレクションが存在し、そこでコレクションを再検討する必要があります。つまり、コレクションを形成した人物の〈知〉、そこから〈ところ〉を再生していくような新しい研究があつていいのではないだろうか、と思つています。

法政大学においては能楽研究所のコレクション、あるいは沖縄文化研究所のコレクションがありますが、コレクションの中から「生き方」というものを探っていく可能性があると考えています。例えば能楽で言うと、世阿弥が能を説きながら、実は「生き方」を探ることが一つのテーマにありました。そういう「教養」としての、「生き方」を探るような研究があつてもいいのではないだろうかと思つています。

「生き方を探る」、「いかに生きるか」、ということが、来年度発足する本学の新学部「キャリア・デザイン学部」の理念であり、テーマであります。実は私もキャリア・デザイン学部に文学部から移籍することになっておりますが、生き方を

探っていく「教養」の涵養に寄与できるものと内心期するものがあります。

大学博物館に関して参考までに申し上げますと、東京大学総合研究博物館が、コレクターから寄贈された資料を公開する際に、今までは単にそれを学術資料として公開するだけでしたが、最近ではコレクターの学問、あるいはコレクターの〈こころ〉を紹介する展覧会を行っています。つまり、コレクターの「生き方」、あるいはそこにある「教養」も含めた公開の仕方に関して、「なかなか先を行っているな」、と私なりに感じました。東大関係者がどこまで認識しているかわかりませんが、私はそういう解釈をしています。

先ほどご紹介したマンローは、エジンバラ大学博物館で及び、学術資料を通して自分の「生き方」を形成していきましました。これからは、大学博物館のコレクションから〈知〉と〈こころ〉の再結合に関する研究を行い、その中から「生き方」を学んでいく、いわゆるキャリアデザインする方向性があった方がいいのではないかとこれは私からの一つの提言であります。以上で私の発表を終わらせていただきます。

牧野 ありがとうございます。柳、それからマンロー、宮本、最後に東大の総合博物館の例を出され、この一世紀におけるコレクションという人間の営みの持つ意義を知るところとの結合と分離の過程、そしてその新たな可能性を見据えてご報告いただきました。

それでは、最後になりましたが吉村先生、宜しくお願いたします。

先鋭化した心理学の諸パラダイムと それにより切り落とされたもの

吉村 浩一（明星大学 人文学部教授）

法政大学文学部の先生方の中に、話題提供者として学外者が一人ポツンと参加させていただいているのは、来年四月に新しく立ち上がる「法政大学文学部心理学科」の教員スタッフの一員としての着任が予定されていることが理由だと思えます。そこで本シンポジウムでは、創設される心理学科にどのようなビジョンを描いているかを披露させていただくことが任務だと心得て、心理学の現状と二一世紀への展望を交え



吉村浩一
(明星大学人文学部)

お話の中でうっかり口を滑らせた言わずもがなのことを削除して、書き起こさせていただきます。

「法政大学文学部心理学科」は、認知心理学を核として構想されておりますが、これは、心のさまざまな働きのうち、知的機能に焦点を当てて基礎的研究を大切にする立場だと言えます。幸か不幸か、二二世紀を迎えた現在、心理学は新たなスタートラインに立っているという無色の状態にはなく、さまざまに彩られた何本もの鋭いパラダイムがすでに走り続けています。その点についての説明から始めさせていただきます。

まず、心の営みを脳の働きと捉え、脳におけるその営みの場を同定していくこうとするパラダイムがあります。この方向

ながら、お話しさせていただきます。本稿では、当日の二分という短い時間では的確に説明できず言葉足らずであった点を補いつつ、かつ、当日の

性は、「二二世紀は脳の世紀」という時代精神とも相まって、もっとも太いパラダイムと言つてよいでしょう。本日の文学部八〇周年記念行事の目玉に、養老先生の「脳と心理学」というご講演が据えられていることから、このことが伺えます。心理学は昔から脳の働きとの関係を見つめてきており、この方向性自体は特段、新しいものでありませんが、近年、いよいよ重要なパラダイムになってきたのは、心的作業中の脳の働きを「非侵襲的」に観測できる技術が進歩したからだと思えます。しかもその観測は、医者や神経生理学者でなくとも行えるようになってきております。最近のfMRIやMEGなどでは、脳内に問題を抱えた患者さんの治療目的だけでなく、普通の人々がアラートな意識のもとに精神作業を行っている最中の脳活動を微細な部位同定と一ミリ秒単位の精密な時間精度で観測できるようになってきました。そのような背景を武器に、心理学者は巧妙でアイデアに富んだ観測条件を考案し、心の解明に従事しています。脳生理学者の片棒担ぎというよりも、自ら率先してこの方向性を押し進めているとの感さえあります。

二つ目のパラダイムは、二〇世紀後半からめざましく発展

してきたコンピュータ科学に基礎を置く方向性です。現在の発展したコンピュータは、ある意味では人間の心の働きよりも複雑で高度なことを、人間とは比べものにならない速さと正確さでやってくる能力をもっています。そのような能力をもつコンピュータで心をシミュレーションし、人間の心の解明を進めようというのです。コンピュータ・アナロジーにより、心の働きの顕現的モデル化を目指そうとする方向性です。

上記二つを、それぞれ違ったパラダイムとして紹介しましたが、これらは、相対に相性がよく、お互いの知見を補い高め合う共存共栄関係にあると言えます。それに対し、次に紹介する臨床心理学は、率直に言って、これらとは水と油の関係にあります。同じ「心理学」という屋根の下に同居していることが不思議に思えるくらいです。心理学とはどのような学問かと尋ねると、多くの人が、特にこれから大学を目指し何を学ぼうか思索している高校生たちが思い描く心理学像は、圧倒的に臨床心理学であるというのが現状です。一〇年、二〇年前なら、そのような思い込みは心理学に対する誤解だと一蹴できたのですが、今もし、そのようなガイダンスをす

れば、それこそ時代錯誤だと一蹴されます。それだけ臨床心理学は社会から必要とされ、貢献もし、学生たちから心理学の専門性を生かした職業として認知されているのです。

ご承知のように、現在、臨床心理士の養成は、大学院において行われています。臨床心理学の専門家の養成に主眼を置いている大学の中には、スタッフの構成上、学部においても臨床心理学を中心に教育しているところもあるようです。しかしその一方で、臨床家を目指すにしても、学部の心理学教育では「認知」を中心とする基礎心理学の考え方と方法論をしつかり学んでおいて欲しいと期待している臨床系大学院も少なくありません。心理学が百年の歴史の中で作り上げてきた人の心の働きを解明するための主要なパラダイムを相対化できる能力を身につけておくことが求められているのです。

心理学における基礎—臨床の関係が、医学における基礎—臨床モデルのように有機的な連関性を構築してこれなかった理由を考えてみたいと思います。「医学モデル」では、基礎医学で解明された治療法や薬を臨床現場に持ち込み、臨床医学はその使用を的確に行う能力を発揮する。逆に、臨床現場で見出された緊急を要する課題を、基礎医学に持ち込み、解決

に向けての集中的基礎研究を促す。優れた連携と言えます。それに対し心理学の場合、基礎心理学は主に人の心の働きのうち知的機能に焦点を当てており、臨床現場で問題となっている情緒や意志に関する問題に手が届いていないのが現状です。要するに両者は、対象としている心の部門が違っているのです。そのため、基礎で得られた知見の臨床への適用を望めない構造になっています。

さて、ここまで三つの先鋭化したパラダイムのお話をして参りましたが、何と言つても心理学独自のパラダイムとして歴史上、重要な位置を占めたのは「行動主義心理学」だと言えます。ご存じのように、これは、二〇世紀の早い時期に、アメリカの動物心理学者ワトソンにより立ち上げられた学派で、それまでの心理学が、被験者の意識に基づく報告、いわゆる「内観報告」をデータとして進めていたのに対し、そのような主観的データにたよっていたのでは心理学は科学として脱皮できないと見なしたわけです。心の科学は、意識を排除し、第三者が外から観察できる「行動」のみを対象として行われなければならないとしたのです。この学派は、現在では一時期ほどの隆盛はありませんが、それでも、現在展開さ

れている多くのパラダイムで、行動データは客観性を保証する重要な要件として尊重されています。

ところで、現在の私たちが行動主義の文脈のもとに生み出されてきた数多くの知見を理解・評価しようとするとき、行動主義の枠組みが実際にどのようなものであったかをおおよそ知ってかからなければなりません。ケンドラー夫妻が一九七五年に行つた「移行学習」という実験を例に、その具体像を映し出してみたいと思います。彼らは、ネズミを被験体を用いて実験を行いました。ネズミを、ジャンピング・スタンドという狭い台の上に載せ、少し離れたところに二つの窓をもつ箱を置きます。二つの窓には、異なる図形が描かれています。たとえば、左側の窓には黒い三角形、右側の窓には白い四角形という具合にです。狭い台の上にいるネズミは居心地が悪く、どちらかの窓に向かって飛び移ろうとします。一方の窓の裏には餌があり、うまくそちらに飛べば窓は簡単に倒れて餌にありつきます。それに対し、もう一方の窓に向かって飛ぶと、窓は開かず、かなり段差のある地面に落ちてしまいます。そこでネズミは、餌のある方の窓を選ぶことに強く動機づけられるわけです。手がかりは、二つの窓に描かれ

た図形にあります。たとえば、三角形か四角形かという形にかかわらず、黒い図形の方へ飛べば餌にありつけるというルールで訓練を受けたとします。何回かの試行錯誤の後、ネズミは黒い窓に飛び移ることをすっかり学習します。この学習が完成したあと、次の段階として「移行学習」へと進みます。黒が正解で白が不正解であったそれまでのルールを、次のように変えます。一群のネズミに対しては、これまでとは反対に白が正解で黒が不正解というルールに、他群のネズミには明るさにかかわらず、三角形が正解で四角形が不正解というルールに変えます。さて、皆さんなら、どちらのルールに移行された群の方が、再学習を容易に成し遂げると思われますか？ それまでどおり明るさ（白黒）が正誤の判断基準であり続ける（次元内移行）方が、判断基準が明るさから形へ変わる（次元外移行）群よりも、再学習がずっと容易だと考えられるのではないのでしょうか。実際、この実験をネズミではなく人間の大人に対してやってみると、（人間の大人である皆さんが予想されたとおり）次元内移行の方が容易なのです。ところが、ネズミの場合、意外にも次元外移行の方が再学習が早いのです。しかも、行動主義に基づく学習理論は、

ネズミでの実験結果を当然のこととして予測し、人間の大人での結果を、自分たちのパラダイムを根底から揺るがす脅威的事実として受けとめたのです。

このようなデータを評価するとき、心理学を学ぶ者は一人の常識人としての視点からのみ判断してはいけません。そのデータを得ようとした理論的枠組み、すなわちパラダイムの内側から評価できる視点も身につけていなければならないのです。少なくとも当時の学習理論では、前半の学習段階で正答であった二つの刺激のうち、一つが正答のまま保持される次元外移行（黒い三角形は移行の前で正答であり続ける）の方が、二つとも不正解に変えられる次元内移行より再学習が容易だと予測したのです。

一九六〇年頃から台頭した「認知心理学」は、行動主義を否定することから生まれたとよく言われますが、実は、移行学習実験の解釈に関する議論などを通して、「認知」という考え方の必要性が行動主義の延長上で育っていた面があるのです。「認知」は、「行動」を否定するのではなく、行動を含み込んだより大きな心理学の枠組みになることを目指したのです。

とは言うものの、より一般的には、認知心理学の誕生は、人間の心の働き、特に情報の取り入れ口である感覚・知覚から始まって、記憶・学習・思考という一連の心の働きを分断することなく、有機的関連をもって捉える姿勢から育つていったと言ふべきでしょう。そのような研究姿勢を実現できたことには、コンピュータ科学の発展が大いに寄与しました。これは、先にお話しした二つ目のパラダイム上に位置する方向性です。

心の働きを分断せずに有機的に捉えてゆこうという研究姿勢は、人間の振る舞いを実験室という現実から隔離した特殊な場ではなく、生活の場の中で検討しようとする「現場主義」の考え方へとつながります。認知心理学創設期の立て役者の一人、ジェローム・ブルーナーは、「意味の復権」という本の中で、当時を振り返り、「意味」こそが現場主義を具現する研究の重要な柱だとして出発したことを強調しています。このような研究姿勢は、認知心理学が、情報処理科学やそれと密接に関わる脳科学としてのみ発展してゆくのではなく、臨床心理学への貢献にもつながる豊かさを含み込んでいなければならぬことを意味していると思います。幸い、近年の

認知心理学は、人間の知的機能だけではなく、感情や意志をも研究対象に取り込み、心の働き全般へと展開していく様相を見せています。私の守備範囲である知覚心理学においても、「クオリア」という知覚者の体験する感情を伴った質の問題を脳科学と対応づけながら検討する方向性も出てきています。

さて、「医学における基礎と臨床」モデルが心理学に適用できないとすれば、来年度から発足する法政大学文学部心理学科では、どのような学部教育を目指すべきでしょうか？ 本日前話ししてきましたように、現在の心理学ではさまざまに先鋭化したパラダイムがすでに走っています。これらのパラダイムを理解するために、学生は過去の心理学を学ばなければなりません。これは、未来に向かって白紙状態からスタートできないことの宿命です。そのような学習を通して、あるパラダイムから見放されたり無視されたりしてきた知見が、別のパラダイムでは重要な意味をもちうることを発見できるはずで、初學者には、それぞれのパラダイムの背景を読み解いて、データの価値を的確に捉えることが容易ではありません。学部教育、特に一・二年生のうちに、具体的知見

の読み取り作業を手がかりに、そうした視点と能力を鍛えるべきだと思います。それこそが、医学モラルとは違った心理学の現状を踏まえた「基礎」を学ぶことの中身だと考えます。そういうトレーニングを受けていれば、三年生に上がるとき、心理学の各教員スタッフがどっぷりと浸かっているそれぞれに先鋭化したパラダイムの中へ進むイニシエーションに耐える力が身につけているものと信じます。

牧野 ありがとうございます。吉村先生は現代心理学の一世紀の流れを、主要な三つほどのパラダイムに整理されて、その課題、特徴、問題点などに触れていただき、これらのパラダイムが持っている積極面と消極面、いわば切り落とした側面にも光を当てて、今日の心理学の教育と研究の在り方を認知心理学の重要性と絡めてご報告いただきました。

先生方には、力のこもった興味深いご発表有り難うございました。さて予定した時間も相当経過しておりますので、ここで五分間の休憩に入ります。

小 憩

牧野 それでは早速後半の議論に入ります。最初に、司会者から前半のご発表について簡単な補足をお願いする狙いを含めて質問させていただき、次に先生方からコメントいただき、司会者も加わり五人の間で質疑応答を行ないます。先ほどの順番を変えて、逆からお話いただきたいと思えます。

まず吉村先生には、行動主義的な立場に対してかなり批判的な観点もご指摘いただいたと思います。そうした議論とも関連して、先生ご自身の立場を認知心理学的な立場と理解してよいとすれば、人間の心というものを考えたときに、知意という区別の仕方は、現代の心理学ではどの程度の妥当性があるとお考えでしょうか。心理学という学問の名称は、語源的にはサイコロジ、サイコのログスです。一八世紀に知情意という伝統的区分が確立され、逆に一九世紀の後半にデイルタイから厳しく三分法的な心の区分の仕方が批判されて、精神は全体的に把握しなければいけないという批判がすでに出ていたわけです。心理学が扱える心とはいったいどういうものなのか、逆に言えば心理学が扱うことのできない心の領域はあるのかどうかと言ひ換えてもよいと思えますが、いかがでしょうか。

吉村 知情意という三分割の問題についていいますと、私どもの認知心理学の中では、知覚が入口で、それから記憶、学習、あるいは思考と別々の人たちが専門的に研究する。複雑なものですから、分けなければ研究ができないという事情があったと思うのです。それに対して、そういう分け方をするのではなくて、心の一連のプロセスとして、認知として括り、入口から一番奥の、一番高次な思考のところまで、さらに言えばそれを受けて、外界に対して働きかける振るまいのところまで含めて、一つの系として見ていこうというのが認知心理学の登場の理由だったと思うのです。

そういう意味で、牧野先生がおっしゃったような方向で、一九五〇年ころに認知心理学が立ち上がった。その頃、教育学でも有名な認知心理学の立役者の一人、アメリカのジェローム・ブルーナーなどは、意味をきちんと扱っていける心理学、それらを排除してきたそれまでの心理学に対して、意味を堂々と論じていける心理学としての認知心理学を打ち立てるべきだと主張したのです。しかしそれでもまだ、知覚から始まって、思考、知性だけです。それに対して今の最先端の脳科学にコミットしている心理学者たちは、例えば知覚の領

域で言うと、見たり触ったり聞いたりしながら同じものに対して複数のチャンネルから受け入れている情報をいかにバイディングしているかということも脳科学のレベルで検討しています。あるいはまた、本日の養老先生のご講演の冒頭に出てきたクオリアについて言いますと、それを支える知性だけではなく感情とか情緒というようなものも、いよいよ取り込んで議論していこうという方向が現れ始めています。それが意外なことに、最もハードな分野である脳科学をベースにした認知心理学から始まっているところに、不思議さを感じなくもないのですが。

牧野 一つだけお尋ねします。行動主義に対して心なき心理学というような批判もあると思いますが、先生としては心という概念はむしろポジティブに押さえるべきだということをお考えとして理解してよいのでしょうか。

吉村 行動主義を決して批判しているわけではありませぬ。それは、パラダイムとして十分成り立つ運動だったと思います。ただ、私には行動主義には憎つき思いがあります。私は、世界が逆さまに見えるめがねを二週間つけ続けたときどのような変化が起こるかという研究を行っていますが、ち

よほど行動主義華やかなりし時代にその研究がされたときに、ある運動課題をさせて、その課題がどれだけ短い時間で誤らずにできるようになったという遂行成績から順応の程度を評価しようという動きがあったのです。その場合、たとえうまくなくても、まだ逆さまに見えているという意識は無視されてしまいます。私は、意識できるレベルでの知覚を大切にしたいと考えております。

牧野 ありがとうございます。続いて金山先生に、先ほどのお話の補足的な意味も含めてお尋ねしたいと思います。

先生は、ただものを並べるということではなくて、人間の生き方あるいはいい意味での教養、単なる知識の積み重ねではなくて、人間としてどうよく生きるかというものの表現や活動としてこのコレクションの在り方を積極的に考えながらおられたと思います。そのときに、非常に積極的な例として、それから日本の昭和の三〇年代以降の流れの中でのネガティブな評価にも触れていただいたわけです。

まず質問させていただきたいのは、例えば博物館に陳列されるに値する評価があるということに最初に触れましたが、先生ご自身は展示に値する、値しないという問題は、ど

のようにお考えになりますか。ご存じのように、アメリカのスミソニアン博物館ではエノラ・ゲイの展示は結局実現しなかった。これは極端な例だと思えます。あるいは芸術の世界では、有名なマルセル・デュシャンのファウンテン、泉の例があります。男性の便器をひっくり返したものを芸術作品として認めるのか認めないのか、展示するに値するのかわからないのかという問題です。金山先生は、教養というものの重要性をご指摘になりましたが、そういう問題とも関連してくるように思います。

金山 いま牧野先生が挙げられたことに関していえることは、アメリカのスミソニアン博物館で、戦後五〇周年の記念のときに、マーティン・ハーウィット館長がエノラ・ゲイを展示して原爆展をやろうと企画し、かなりの準備をかけていたのです。ところが退役軍人たちがアメリカ議会に対してロビー活動をし、マスコミも結構右へ習えして、それを中止させた。館長は、アメリカが日本に行った行為を歴史的に再評価して展覧会を企画したわけです。だけどそれは政治的な圧力によって中止させられた。これは学術的に言えば展示に値するのだけれども、現実としては展示できなかったというケ

ースです。

博物館は、展示の背後に教養としての「社会の中で個人がいかに生きるか」というテーマをどのように取り入れて実行するかが課題です。場合によっては、スミソニアン博物館の原爆展のように、当局から圧力のかかることがあるでしょう。しかし、教養を個人の次元に押し込めないためには、展示する価値のあるものをきちつと公開することです。そういう点では、私は、現在の公立博物館よりは大学博物館のほうに期待していきたいと思っています。

牧野 ありがとうございます。大学という場ではすぐ図書館を考えますけれども、大学博物館の重要性をご指摘くださったことは、大変重要だと思っています。

次にプロウカリング先生に一つ質問させていただきます。人生は筋書きのないドラマであるとも言われますが、ドラマという概念は大変広い意味でも使われています。今日ドラマという言葉と関連して、身体の重視についても触れられたと思います。ドラマとパフォーマンスの関係と区別をどのようにお考えでしょうか。

プロウカリング パフォーマンスの基本的な意味は、や

っている人とそれを見ている二人がいるということ。一方が皿回しをやっていて、もう一方が見ているということが一番根本的な定義なのです。しかしたまたま公園で人が折り紙を作っているのを見ているだけではパフォーマンスにならないで、日常生活と独立した場所と時間という条件がないとパフォーマンスと言えません。その上で芸をやるというのが最も基本的なパフォーマンスです。それは動物でも良いのですが、複雑になると、パフォーマンスは演技という形になります。そこでは見る人がやる人を見ているといった関係に、もう一つの複雑さが加わり、やる人である役者がもう一つの別の人格を演じる。すなわちそうした三面性のある関係となって、見ている人は同時に役者を見ながら、その役者の演じている役も見ているわけです。だからそこで、本日演奏されたカルテットの音楽と演劇の違いが見えてくると思います。両方もパフォーマンスですが、二重性があるのは演劇のほうです。

もう一つの一般的に使われている意味では、例えばスポーツ選手のパフォーマンスです。ある役を演じているのではなくて、ある基準があつて、見ている人は観客というよりもむ

しろ判断する人となります。野球選手のホームランをいくつ打ったかという数字が出せるようなパフォーマンスは、ある基準に基づいて判断されるのです。その延長でパソコンのパフォーマンスというのもあげられます。が、見る人がいなくて、自分自身がパフォーマンスを判断する場合もあります。

牧野 ありがとうございます。プロウカリング先生のきょうのお話では、ドラマという言葉の持つ様々な広がりを目指されましたが、演ずる者と見る者が歴史という舞台の中で生きている人間の場合には切り離すことができません。見る者が同時に行為する者であり、行為するものが見る者でもあるという、アクターとスペクテーターという二つの役割を同時に果たさなければいけないという、非常に複雑な問題にも触れられていたと思います。

それでは最後になりましたが、勝又先生のご報告で一番大事な部分の達人について、質問させていただきます。これだけ科学技術が進歩して、一つの学問分野の中でも極めて専門化、分散化している状況の中で、こうした科学技術を使いこなす達人というものが、私たちの生活の中でどの程度可能なのかという問題が出てくると思うのですが、この点はどうか

考えてしょうか。

勝又 先ほど言えなかったことを少し補足したい。日本の知識人は教育体系のこともあって、西洋文明と伝統的なものとに引き裂かれてきました。これはむろん明治の知識人だけでなく、現在の我々にも繋がっている。そういう近代の歴史のなかで、日本人は少しずつ日本化、日本訛化するということもやってきた。

私が見えるのは文学の領域ですが、たとえば、ずっと否定的に見られてきた日本の「私小説」というものがあります。これは西洋の近代小説、ノベルを仕入れて日本的な小説の形を作り上げたのだと、私は思っています。私小説とは何か、そこにはいろいろな問題がありますが、大きな条件の一つに日本人の好きな道のある思想というものがある。剣道柔道のあの「道」です。それが日本では、身体訓練とは少し違うお茶やお花の世界にまでくっつきます。中国でもお茶は大変さかんで、中国のお茶の文化はすごいのですが、しかしそれは総じて茶芸と言うのだそうです。茶道とは言わない。しかし日本人はお茶をいれるのにも、それをいかに生きるかというベースに載せないと承知しないのです。お花をいけるのにも、

いかに生きるか。香を焚くにも、いかに生きるか、香道。野球さえも日本では野球道なのだ、赤瀬川隼は言っています。そういうふうには、文学をいかに生きるかのベースに載せたのが、私小説という作者の人格と離れたいスタイルです。むしろ歌道の西行がおり、俳聖の芭蕉がいたような文化伝統があったからです。つまり小説道の達人小説です。これが日本的な、伝統的な精神の、鈴木大拙の言う「日本的靈性」の一つの帰結ではないかと、私は思っています。

そして日本文化のあらゆる領域でそういうことがあるはずですから、それをもっと認識していつて、日本訛と言うことを恥じないで、もっと積極的に取り込み発展させるつもりで、文化のなかにも、教育のなかにもプログラムしてゆく、二十世紀への希望は、あるとすればそんなところに置きたいと思いますが、いかがでしょうか。いま大学院で進めている「国際日本学インスティテュート」という新しい試みも、そういうものの一つとして、私は考えたいと思っています。

牧野 ありがとうございます。いま道の思想の重要さを説かれましたが、この問題は先ほどの記念講演の例で言えば、養老先生が人工と自然という対比をお使いになりました。ま

さに人工とは勝又先生の議論の文脈では、技術ということになつてくると思います。

ですが、自然という言葉も人間の自然、ヒューマンネチャー、人間の心という本日のテーマに他なりません。人工、テクニクというものも、自然の模倣に由来しています。そういう意味で人工と自然の問題は、ただ切り離され、あるいは対立的な関係にあるだけではなく、同時に両者の複雑な関係とともに融合、統合されるべき課題を持っている事柄であるということも、勝又先生のお話の中からも見えてきたと思います。

シンポジウムのまとめ

牧野 議論が白熱する中で誠に残念ですが、定刻も迫ってまいりました。これまでのご発表の内容と質疑応答を踏まえて、本日のシンポジウムの趣旨をまとめさせていただきます。

まず第一に、これまでの議論によつて知やこころのあり方のさまざまな相違や関連が明らかになりました。それと同時に人間理解や社会における人間のあり方に対する捉え方の相

違や関わりもまた、見えてきたように思います。このことによつて二一世紀の知や、これまで常識のように受け入れられてきた諸学問の三分、つまり人文・社会・自然という学問区分そのものが根本的に問い直されている時期に直面していることも明らかになってきたと思います。今日では自然科学、実験科学の領域に属するとみられたような心理学、認知科学などの諸学問もまた、人間やこころの理解にとつて不可欠であることも明らかになりました。

第二に、このことは、日本でも人文科学と呼ばれる学問の枠組みの見直しや諸学問および個別領域の相互の対話・交流や学問的な方法論の共有の方向を否定なしにいっそう促進する要因になっている、と行うことができましょう。人文科学の仕事としては、人間の全体的な理解や解説のためには伝統的な古典のテキストの解説や解釈だけでは不十分です。こうした研究方法は、最先端の科学技術の成果と結びつけられて、生ける人間と社会や歴史、世界のあり方を解説し理解することが求められています。人文科学は、本来このような課題を担ってきたはずであります。来年度新設の心理学科は、こうした研究教育の動向をいっそう促進することが大いに期

待されるところであります。

第三に、人文科学に属する諸学問の個別領域だけを見た場合でも、日本と西洋、日本とそれ以外の諸文化、いわゆる異文化理解とともに複数の学問観に基づく多元主義的な人間観・社会観・宗教観・文化観などのインターフェイス、境界線・接点・共通問題の認識が求められていることも明らかになりました。それだけに、伝統の再評価と知の創造的な営み、教育の現場に立つ人間の教養やこころのあり方もまた、吟味されることになってきました。

第四に、本文学部とも所縁のある漱石の「草枕」だけでなく、「こころ」でも描かれていたように、一個の人間が人生をどのように生き抜き、どのような人生を全うするかという課題は、今日のような見通しが利かずいつなが起こるか予測不可能な時代には、ますます重要なテーマとなつてきます。科学技術の高度化・専門化・学問の進歩発展が一方で快適な生活を実現してきましたが、他方人間のこころを歪めており創造した知識が真に心豊かで幸せな人生をどれだけ実現できているかは、大いに疑問であります。その際、人文科学には、それぞれの分野で、それ固有の学問的課題と方法に基づいて、

つまり、この時代の変貌する知のあり方から人間とこのころのあり方の本質や変質の仕方、歪んだ姿を捉え・正確に描き出し・それを本来のあり方へと訂す道筋を示すことが求められていると言えましょう。

第五に、このような時代の要請は、これまで人文科学が直面したことのない困難な課題であるとも言えましょう。こうした事態を司会者は、シンポジウムの冒頭で「人文科学の危機」と呼んだ次第です。しかし、こうした課題に取り組むことにこそ、ほかならぬ人文科学の存在意義と今後の新たな展開の可能性が開かれていく、と言えましょう。また、アメリカの場合には、つとに財政的な問題との関連から「人文科学の危機」が指摘されてきました。九百年に及ぶ歴史のなかで長い間大学は、「ユニヴァースティ」と呼ばれてきましたが、一九六〇年代には「マルチヴァースティ」という呼称が使われ、近年では「デモヴァースティ」と呼ばれる現象が進んでいることが指摘されています。こうした現象もまた、人文科学にとっても必ずしも有利な教育研究条件になっていないと言われています。

しかし日本における、また本学における人文科学の今後の

可能性は、こうしたさまざまな課題をむしろ積極的に引き受けながら、来年度新たに加わってこられる大勢の先生方や関連の学間に携わる先生方とともに、これまでの研究教育上の伝統を發展させ、法政大学固有の人文科学という知の創造と教育・伝達・発信の場になりうることを期待して、本日のシンポジウムを終了させていただきます。長時間にわたりご拝聴、誠に有り難うございました。また、四先生には、改めてお礼申し上げます。本当に有り難うございました。